

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、空欄にした部分があります。）

人は、いつのまにか形成された《身体性》つまり「自己ルール」に規定されて生きている。しかし他人との関係の中では、「自己ルール」だけを押し通すことはできない。わたしはこれが「好き」だとか、これこれが「正しい」と思う、は、必ず他人の「好悪^{こうお}」や「善―悪」のルールとすこしずつ食い違う。□ A、大なり小なり自己のルールを他者たちのルールとすりあわせ、調整しないわけにはいかない。それが人間関係の基本なのだが、このこともそう簡単にはいかない。

たとえば、「わがまま」な性格の人、自己中心な人は、他人は自分のルールを受け容れてくれるものと思ってしまう人である。でも、そういう人はふつうはキラワレル^A。ただし、何かとくに能力があったり、境遇^{きょうぐう}がそれを許したりすると、自己中心性を押し通し続けられる場合もある。□ B 財力や権力をつかめば回りの人間がそれを許すので、そのことも可能になる。だが□ ①には、たいていの人は世間のルールや周りの人間のルールと自己のルールとのズレを調整しながら生きている。

人間関係は基本的に「承認のゲーム¹」である。他者たちから一定の承認を得ることで、はじめて人は自己価値を確認できるし、また一定の社会的地位を実現することができる。どんな人もこのことをアンモク^Bのうち知っているので、自己のルールと他者のルールを調整しながら生きている。

しかし、自己のルールが、どうしても世間一般のルールや他者たちのルールと折り合えない人にとっては、自己ルールはオモ二^Cになる。すで見たとように、自己ルールは、「幻想的身体」であって自分の自由になるものではないし、またそれ以前に、それが自己ルールとして形成されたものだという自覚をもっている人も少ない。「自己理解」（自分についての主観的な理解像）あるいは「自己了解」（内的な反省をとおして捉え直された自己理解）ということが必要となるのは、そう²いうときである。

人間は「自己自身」をほんとうに理解できるだろうか、という言い方がある。また逆に、「ほんとうの自分」を知れ、という言い方もある。われわれの観点からは³どちらもあまりよい考えとは言えない。

じつは「ほんとうの理解」とか、「自分自身のほんとう」といったものはそもそも存在しない。むしろ、人間とはつねに自分自身を理解（＝了解）しつづけている存在であり、そこには単に「よい自己理解」と「悪い自己理解」があるだけだ。あるいは、よい自己了解が人間のあり方をよくしていく、と考えたほうがいい。

ところで、「自己了解⁴」にはいくつかの原則がある。まず、先に述べたが、「自己了解」とは「ほんとうの自分」についての理解のことではない。自分自身を、あるより適切な仕方理解しなおすことである。

簡単に言って、人から愛されるシシツ^Dと能力や才能をもっている人は「承認ゲーム」でまずうまくやっていける。これは不公平な現実だが、いまのところこれに文句を言ってもはじまらない。他者との関係でなぜかうまくいかない人は自己自身と折り合っていないことが多く、自己了解を試みる理由があるわけだ。

人間は、自己自身について、ただ二つの材料をもっている。一つは「自己理解」、つまり誰もが自然にもっている主観的な自己像。もう一つは自分にそう感じられる限りでの「他者による自己像」。

□ C、「自己理解」と「本当の自分」があるのではなく、「自己理解」と「他者による自己像」（と自分に思える像）の二つがあるだけだ。両者のあいだに大きな行き違いやズレを感じない場合は、人はそれほど「自己」について不安全感や不安感をもたない。しかし誰でも大なり小なりこの間にズレや食い違いを感じる。人は「□ X」が気になるし、そこに自己像とのズレを感じると不安になる。この不安が、たえず人をして、自分はこういう人間だろうかどと気遣^{きづ}わせる根本動機だ。つまり、人間は基本的に「自己配慮^{はいりよ}」する生き物だが、この「自己配慮」自体が他人との関係からやってくる。言いカエレバ^E、人が「承認ゲーム」を生きているということに由来している。

ともあれ、われわれはこういう自分についての不安の場面で自分自身を了解するように促される。□ D、自己を適切に了解することには基本的な困難がある。つまりそれは、そもそも自己了解は他者との関係にねざす自分の不安が動機になっているので、われわれはつい、この不安を打ち消すような主観的自己理解を行なってしまうということだ。

適切な自己了解のための原則を、つぎのように考えることができる。

自分で自分のことをいくら考えつめても、よい自己了解には達することはできない。まずわれわれが頼りにすべきなのは、「他者の自己像」である。もちろん他者は多くいるので、特定の誰かの「自己像」だけを頼りにできない。複数の他者の自己像の違いの中から（いわばその視差^{しさ}の中から）、「自分の像」の中心（＝自分は他者にとってどのような人間か）をつかみ出すほかはない。これが基本原則である。

《中略》

ともあれ、よい「自己了解」は、「ほんとうの自分」を探したり、自分自身の声をひたすら自分で聴くことではやってこない。それは自分についての他者の声をよく聞き取ることで、はじめてもたらされる。一步すすんで言えば、自分自身の自己像と他人による自己像の間

の「視差」(視線のズレ)を通してはじめて人は自分のあり方をよく理解できる。他人の声だけが、自分の過剰な思いこみやバランスを欠いた防衛や攻撃性などを教えてくれるからだ。

E 他人の声は万能ではないし、つねに他人の声にあわせるのがよいというわけではない。他人の声だけを頼りにしていると自分の主体が危くなる。他人の声を②に判断するのはやはり自分なのである。しかし一つ覚えておくべきことがある。もし他人がなんらかの理由で自分に攻撃やルサンチマン(ねたみ)を向けているのでなければ、他人の声は、つねに「正しい」とは言えなくともつねに「正直」な声だということだ。

(竹田青嗣『哲学ってなんだ』より)

問一 — AとFについて、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 — AとEを補うのに最も適切な言葉を選んで、それぞれ記号で答えなさい。同一の記号を用いるのは一度だけです。

ア もちろん イ だが ウ つまり エ また オ そこで

問三 — ①、②を補うのに最も適切な言葉を選んで、それぞれ記号で答えなさい。同一の記号を用いるのは一度だけです。

ア 徹底的 イ 相対的 ウ 最終的 エ 一般的 オ 主観的

問四 — 1「承認のゲーム」の説明として最も適切なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 多くの人がルールを調整しつつ生きている中で、例外的に自己中心性を押し続ける者がいても、一定の条件があれば周囲がそれを認めるという人間関係の基本。

イ 財力や権力を持つ者は自己ルールを常に承認され、持たない者は自他のルールの調整を図るが、その均衡によって人間関係が円滑に進んでいくという社会の構図。

ウ 自己ルールを他者のルールとすりあわせて調整し、周囲から一定の承認を得ることによって、自己の価値を確認したり社会的地位を獲得したりしていく行為。

エ 他者のルールを通して自分の本当の姿を知り、そこから分かった自己の欠点や能力が劣る点を改善することで、自己価値や社会的地位が認められるという過程。

問五 — 2「そういうとき」とありますが、「自己了解」が必要になるのはどのようなときですか。「くとき。」に続くように文中から三十七字で抜き出し、その最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含みます。

問六 — 3「どちらもあまりよい考えとは言えない」とあるが、筆者の考えとして最も適切なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

ア 人は本来的に自分自身を理解していて、それがどういう理解かによってその人の在り方が決まるものであり、「ほんとうの理解」や「ほんとうの自分」は存在しない。

イ そもそも人は自分を客観視できないので、「自分自身をほんとうに理解する」ことは不可能であり、理解したつもりでも、それは偏った自己理解に過ぎない。

ウ どうしたら「よい自己理解」や「悪い自己理解」につながるのかを考えるよりも、「ほんとうの自分」を探し求める方が「承認ゲーム」でうまくやっついていける。

エ 「自己理解」、「自己了解」というものは、自分の自由になるものではないので、これらを通じて「ほんとうの自分」を理解するのは根本的に不可能である。

問七 — 4「自己了解」について、次の1、2に答えなさい。

1 筆者はどのようにすれば、自分自身を適切に理解できると述べていますか。説明しなさい。

2 自己を理解するとき、どのようになりがちだと筆者は述べていますか。説明しなさい。

問八 — Xに当てはまる適切な表現を考えて答えなさい。ただし「他人がく」という書き出しに続くように書くこと。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合で、空欄にした部分があります。)

放送部員で高校三年生の知咲は、一年生の時の放送コンクールで失敗したことが忘れられず、コンクールへの出場を恐れ、避けるようになっていた。そんなある日、部に馴染めていない様子の一年生、唯奈の面倒を見るよう部長から頼まれたことをきっかけに、唯奈とコミュニケーションを取るようになり、次第に唯奈に慕われるようになった。

私たちの通う高校のすぐそばには、チェーン店のファミレスがあった。ドリンクバーを頼めばいつまでも居座れるので、居場所のない学生たちの溜まり場と化している。

私たちは入店するなり、一番奥にある席に座った。最も人目につかない場所だ。

「で、相談って?」

「原稿のことで悩んでるんです。どうしようかなって」

そうやって、彼女はトートバッグからピンク色のクリアファイルを取り出した。

「原稿を作るの、初めてで」

「唯奈ちゃん、結局アナウンス部門に出ることにしたんだ?」

「はい。知咲先輩が、私の声がアナウンス向きだって言ってくれたんで。私、知咲先輩にそう言ってもらえてすごく嬉しくて」

私の名前を、彼女は大切そうに何度も紡いだ。宝物だと言ってガラクタを抱きしめる、幼い子供みたいに。なぜだか心臓の裏がざわついて、私は意味もなくグラスについた水滴を指の腹で押し潰した。

「それで、その原稿っていろいろのは?」

唯奈がおずおずと原稿用紙を差し出してくる。四百個のマス目は丸っこい文字でびっしりと埋め尽くされていた。書いては消してを何度も繰り返ししているのだろう、紙面のところどころにナマリイロの汚れが付着している。私はおしぼりで一度手を拭くと、汚さないようにサイシンの注意を払いながらそれを受け取った。

「すごいね、全部自分で書いたんだ。唯奈ちゃんって中学から放送部?」

「い、いえ。高校になって、初めて入りました」

「へえ。何で入ろうと思ったの?」

私の問いに、唯奈はごくりと唾を呑んだ。無防備に晒された喉が微かに震える。彼女は一度大きく息を吸い込むと、勢いに任せて言葉を吐いた。

「伝えたいことを伝えるのが、へたくそだからです」

そうなの?と、私は小さく首を傾げる。唯奈は顔を赤らめたまま、そうです、と頷いた。

「私、昔から自分の気持ちを伝えるのが、その、苦手で。だから、そんな自分を変えたいと思ったんです。人前で話す練習をすれば、私も変わるんじゃないかって、そう思って」

「変われそう?」

「わかんないです。でも、私、こうやって誰かに伝えるために自分で文章を書いたり直したりするのって初めてで。なんか、頑張りたいなって、そう思ってます」

唯奈の指が、落ち着きなく自身の前髪に触れた。透明なレンズ越しに、彼女の長い睫毛が上下するのが見える。唯奈はグラスに入った水を一気に飲み干すと、それから言った。

「先輩は(注)Nコン、どうするんですか?」

その問いに、私は一瞬言葉を詰まらせた。紙ナプキンを一枚手に取ると、くしゃやくしゃと丸める。手の中にある乾いた紙の塊を、私はそのまま押し潰した。

「出るつもりはないんだ」

「なんでです?」

「うーん、なんとなくかな」

曖昧な微笑。曖昧な返事。私が他者に見せる感情はいつだって、水で薄めた絵の具みたいに芯がなくてぼんやりしている。他人に本音を見せるのが恐ろしくて、だからこんな風にめいっばいキシヤクした言葉しか私は相手に伝えられない。

一瞬だけ、唯奈の表情に影が過ぎった。彼女は自分を励ますように、ぎゅっと拳を握りしめた。

「でも、私、先輩と一緒にNコン出てくれたら嬉しいです。私、放送部で他に仲いい人もいないし。だから先輩だけが頼りなんです」

「そう言ってもらえると、なんか照れるね」

先輩だけ。その言葉に、私は無意識のうちにAが緩むのを感じた。良い先輩を演じられていることを素直に喜ぶ自分がいる一方で、脳の奥にいるもう一人の私がそんな自身を嘲笑する。

——本当は、自分だけを頼ってくれるなら誰でもいいんだ。他人から求められることで、自尊心を満たしてるだけなんだよ。膨れ上がった自意識が、私の首に手を掛ける。これがお前の本音だろうと、切り捨てたはずの感情を私の眼前に突き付ける。それを見ないフリをして、私は目の前の後輩に話し掛けた。

「でも、せつかくだし他の部員とも喋ってみなよ。みんな唯奈ちゃんと仲良くなりたがってるよ」

彼女は狼狽えたように視線を右へ左へと彷徨わせていたが、やがて観念したのか、こくりと首を縦に振った。

「先輩が言うなら、頑張ってみます」

³ チクリと胸に走った痛みは、きつと私の気のせいだった。

帰り道。夕日は既に沈もうとしていた。藍色の空の裾を橙色の光が惨めつたらしく掴んでいる。原稿の端を握ったまま、唯奈は添削された部分を嬉しそうに何度も指でなぞっていた。赤いボールペンで偉そうに書き込まれた文字は、すべて私のものだった。これまでの部内練習で先輩から **B** を酸っぱくして言われてきたことを、そのまま私も唯奈へ伝えた。アナウンス部門では原稿の出来も重要だ。^E「ヨクヨウのつけ方や言い回し」をいくつも試し、一文字一文字を推敲していく。単語の横に引かれた青い波線はアクセント注意のマークだった。

「先輩、今日はありがとうございました」

唯奈がはにかみながら、しかしはつきりとした声で私に告げる。彼女の声音は耳に入った途端、溶けるように私の意識へと馴染んでいった。

「ふふ、大したことはないよ」

「そんなことはないです。私、先輩には本当に感謝してるんです。先輩に会えたから、放送部に入って良かったなって、本気で思ってるんですから」

熱っぽく語る唯奈に、私は思わず吹き出してしまう。大袈裟すぎない？ と尋ねるが、彼女は真面目な顔でその言葉を否定した。

「私、意気地なしだから。誰かから優しくされるのを待ちやうんです。他の一年生の子たちは中学の頃からの友達だったみたいで、なんかうまく溶け込めなくて。だからスタジオとかでは一人で練習してたんです。録音練習なら、友達がいなくても自分でチェックできるから」

「あー、だからいつも声録って練習してたんだ？」

「はい。けど、最近は先輩がいるから、毎日練習に行くのが楽しいです」

ストレートな感情をぶつけられ、一瞬息が詰まった。唯奈の背筋はぴんと真っ直ぐに伸びていて、その目は前だけを向いていた。新品同様の彼女のローファーが、力強くアスファルトを蹴る。唇から覗く白い歯がなんだか眩しくて、私は思わず目を伏せた。

「あ、」

横断歩道に差し掛かったとき、唯奈が慌てたように声を発した。歩行者用の信号機が、青い光を点滅させている。思わず足を止めた私とは対照的に、唯奈はぱつと駆けだした。⁵引かれた白線を軽やかに踏み、彼女はそのまま向こう側へと渡り終えた。

振り向いた彼女が、無邪気に私へ問いかける。長い髪がさらりと翻るのが、まるでスローモーションのように見えた。

「先輩、こっち来ないんですか」

信号が赤に変わる。車は来ない。しんと静まり返った道路を挟み、私と唯奈は見つめ合った。鞆がやけに重い。吹き抜ける風は生ぬるく、私をひどく不快にさせた。

「うん、まだ」

⁶ 私は、足を踏み出せなかった。

その日は朝から雨だった。湿気を孕んだ空気は重く、陰鬱な色をした雲が空の大半を占めている。放課後になっても雨は降り続いており、窓ガラスにはいくつもの水滴が張り付いていた。

古典単語の再テストを命じられた私は、放課後練習に遅れて参加することになった。スタジオの扉を開けると同時に、こもった熱が外へと押し出される。吐き出された空気に **マジレル** 笑い声は、なんとも楽しげなものだった。

「唯奈ちゃんって、話してみると結構面白いね」

「もっと前から話しておけば良かった」

輪の中央で、唯奈が恥ずかしそうに俯いている。それを取り囲む部員たち。どうやら唯奈はメンバーと打ち解けられたようだ。そう認識した瞬間、ギシリと心臓が軋んだ。

「あ、知咲先輩」

こちらの存在に気付いた後輩たちが、慌てたように挨拶を寄越す。それに手を振って応えながら、私は唯奈の傍らに立った。

「良かったね」

唯奈は一瞬だけ動揺したように眼を見開いたが、やがてふにやりと相好を崩した。

「ありがとうございます、先輩」

「別に、私は何もしてないよ」

そんなことないです、と唯奈は首を横に振った。いつもは空白のその肩の上を、後輩の小さな手が当たり前みたいな態度で占領している。昨日まで、それは私だけのものだったのに。

(武田綾乃『青い春を数えて』より)

注 Nコン：放送のコンテストの名称。

問一 ― A～Fについて、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 ― 1 「彼女は一度大きく息を吸い込むと、勢いに任せて言葉を吐いた」とありますが、この時の唯奈の心情を説明しなさい。

問三 ― 2 「紙ナプキンを一枚手に取ると、くしゃくしゃと丸める。手の中にある乾いた紙の塊を、私はそのまま押し潰した」とありますが、この時の知咲の心情として最も適切なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 触れられたくないことを問われ戸惑うと共に、Nコンに出たくない真意を隠しつつ答えるにはどうしたらよいか思案している。
 イ いつになく思い詰めた表情の唯奈に気圧されると同時に、自分でも決心がついていないのに、どう答えようかと困惑している。
 ウ Nコン出場に関して干渉する唯奈に苛立つ一方、出場を誘ってくれることは嬉しいので、本音を見せないよう押し殺している。
 エ Nコンに出るつもりはないが、そのことを告げると今の良好な関係が壊れるので、どうにか話をはぐらかそうと考えている。

問四 [A]・[B]には、体の部位を表す漢字が入ります。それぞれ漢字一文字で答えなさい。

問五 ― 3 「チクリと胸に走った痛み」とありますが、知咲の心情を説明した次の文章の空欄に入る言葉を、本文をふまえて考え、それぞれ答えなさい。

唯奈の信頼がうれしいのは確かだが、内心では [1] という欲求のために唯奈の面倒を見ているのに、唯奈は知咲の行動が偽善的な気持ちから出たものであることなど想像すらしていないどころか、「他の部員とも話してみるよ、うに」という知咲のアドバイスを素直に聞き入れている。そんな自分を信頼し慕ってくれる唯奈に対して [2] と感じ、また、唯奈がアドバイスどおりに他の部員と仲良くなってしまったら [3] と感じてもある。

問六 ― 4 「唇から覗く白い歯がなんだか眩しくて、私は思わず目を伏せた」とありますが、この時の知咲の心情として最も適切なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 他の部員とうまく話せるかという不安を見せずに、「部活が楽しい」と無理に元気に振る舞う唯奈を、いじらしく感じている。
 イ 練習方法を工夫してどんどん上達していく唯奈が、いずれは自分から離れて自立していくだろうと思ひ、寂しく感じている。
 ウ 「自分の気持ちを伝えるのが苦手」と言いながら、努力を重ねて苦手を克服してしまった唯奈を、うらやましく感じている。
 エ 目標に向けひたむきに努力する素直さや、真っ直ぐに感情を表現する強さを持つ唯奈を自分と比較し、引け目を感じている。

問七 ― 5 唯奈が「引かれた白線を軽やかに踏み、彼女はそのまま向こう側へと渡り終えた」とこと、―― 6 知咲が「足を踏み出せなかった」ことは、唯奈と知咲の考え方や物事に対する態度の違いを、象徴的に表していると考えられます。これらについての説明として最も適切なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 先輩の期待に応えるためにもNコンで結果を出そうとする唯奈の意気込みと、後輩の成長を目の当たりにして限界を感じ、部活に全力を注げない知咲の姿を対照的に描いている。
 イ 先輩の助言を得て、飛躍的に実力を伸ばした唯奈に対し、コンクールに失敗して以来、周囲を拒絶し、成長できずにいる知咲の姿を対照的に描いている。
 ウ 不安を抱えつつも新たなことに積極的に挑戦していこうとする唯奈と、過去の失敗を乗り越えられずにいまだに前に進めない知咲の葛藤を対照的に描いている。
 エ 唯奈が知咲のことを、心底から慕って信頼しているのに対し、理想の先輩になり切れていないと思ひ込んで、自己否定に走る知咲の内心を、対照的に描いている。

問八 ― 7 「相好を崩した」の意味として最も適切なものを、次の中から選んで記号で答えなさい。

- ア 緊張していたのが緩んだ
- イ にこやかな表情になった
- ウ 照れくさそうな様子になった
- エ 声色が明るく変化した

問九 本文における叙述の特徴として適切なものを、次の中から二つ、選んで記号で答えなさい。

- ア 知咲が唯奈の成長を見守る過程で、自分の弱さに気づき、過去から解放されていく様子が描かれている。
- イ 唯奈との会話を直接話法でいきいきと表現することで、知咲に大きな影響を与える唯奈の人物像が鮮明になっている。
- ウ 擬態語や比喻表現を用いることで、読者が小説の場面を想像しやすい描写になっている。
- エ 知咲の視点から登場人物の心理を客観的、かつ分析的に描き出している。
- オ 唯奈が部員たちと打ち解ける場面は、唯奈が今後は知咲の助けを必要としなくなることを示している。
- カ 色彩を表す言葉を多用することによって、軽快で明るい雰囲気文章全体に与えている。